

一、選挙の一般的評價
(二) 總選挙戦の批判

(1) 棄権率の少なること、中立の没落、政府党の不成績等は種々ある原因ありとするも、労働者農民小市民の生活窮乏と政治的関心の増大とを以て、政友民政の勢力が伯仲したことは、この両者が本質的に同一なる資本家地主の政党たること、具体的には、後進大衆の両者を同一物として取扱ったことを意味する(現に彼等は相互の差異を明にするに失敗した)政治的には政局を決定せしめ、以て無産階級の政治的進出を抑制せしめることを以て意圖するを意味する。

(3) 大同、革新等が減少したことは、今日に於ける中立的な勢力の没落と独立して存在し得ないこと、政党的要素の争奪先を行つたことを示す。中立の没落は、ブルジョアの大政黨による所謂政黨政治の完成を示す。

(4) 無産階級の得票は、有権者の三パーセントに過ぎず、政黨に対して不信任の意思を示したことを示す。これは全体としては無産階級が進行する後進たる期待の意思を示すもの、議會的改良の意思を示すものであるが、民衆の自主的政治の要求、労働者農民の政治的向上の要求を内包する。